■モダニズム(近代化運動)■

What　is　モダニズム？

　20 世紀初頭、新しい美学の創出を目指したデザイナーや建築家の集団による運動。その運動は合理性と客観性を重んじる精神にあり、加えて機械時代の新しい技術の誕生や製品が作品に影響している。
　今回私たちは、デザインからモダニズムの動きをみていきたいと思う。
モダニズムは第一次世界大戦からはじまる先駆的段階と 1930 年代から始まる国際様式の二つに分けることができる。

<u>先駆的段階</u>

<u>国際様式</u>

□モダニズム12の特徴

1．反細分化
デザインの力で、今までそれぞれ独立して成り立っていた美学、技術、社会をひとつにまとめようとする動きがモダニズムで目指された。

2．社会倫理
デザインを消費することで、人々の生活は豊かになり、社会倫理も高いレベルで保つことができる。デザインをひとつの政治活動のように解釈した。

3．真実
装飾の拒絶へとつながる。装飾で隠されて、真の素材やそのものの工程（オブジェクトが生み出される道筋）が判らなくなることを恐れた。

4．総合芸術
バウハウスにもみられるように、純粋美術、応用美術、装飾美術、そしてデザイン芸術はその制作上の相違を認めた上で、ひとつの連続体であるべきであった。

5. 技術
モダニズムが大衆に理解可能なものになるうえでの手段として、大量生産とプレファブ方式があったが、先駆者たちの中では理念でしかなかった。
6. 機能
合理主義が技術への欲求と結びついた。効果的に働くよう計画されれば、ものは美しくなる傾向にある。

7. 進歩
かつて世界は無秩序な状態におかれていると認識されていた。美学上の変化ではなく美学上の進歩である。

8. 反歴史主義
反装飾主義と同義語
様式の意味の再定義

9. 抽象性
装飾を排除して構造を表出させ、抽象形態を発展することが、美学上の基礎とされた。
抽象性＝幾何学

10. 普遍性＝国際主義
当時の規律や階層の間にある障壁を除去するために、普遍的なデザインを目指し、国家の違いを消滅させ、国際主義を実現させようとした。

11. 意識変革
デザインは環境条件を改善するだけではなく、人間の心理的なもの、意識を変革させる力があると考えられた。 デザイン＝「偉大な改善者」

12. 神学的
ユートピア的観念を強く持ち、象徴的・神学的なものへの熱がみなぎっていた。デザイン＝世界観

□モダニズムの活動

ドイツ工作連盟
1907年ドイツで結成された、「芸術と産業と職人技術の協力」を通じて工芸の「品位を高める」ことを目的とする団体。のちに連盟の理念はバウハウスにおいて教育問題として具体化されていく。

EX： P・ベーレンスの電気ポット　 H・エームケのDWB展のポスター
デ・ステイル
オランダの美術・デザイン運動。幾何学性を重視し、自然主義的な要素は一切排除した。特に建築空間の総合デザインにおいて実践し、バウハウス等を通じてデザイン、現代建築に影響を与えた。
EX： G・リートフェルトの家具　 P・モンドリアンの絵画

ロシア構成主義
キュビズムやシュプレマティスムの影響を受け、1910年代半ばに始まったロシアおよびソ連における芸術運動。
EX： カジミール・マレーヴィチの抽象画　 タトリンの「第三インターナショナル記念塔モデル」

□そしてモダニズムは…　～国際様式の破綻～
・抽象性・・・時代を超越するものとして捉えられる一方、言語の地域性や特殊性からデザイナーが逃れることを可能にしてしまった。
・国際主義・・・世界を飛び回ることができる階層の人々にとってのみ美しいと感じる理念へと成り下がった。

モダニズムで目指された理念や思想は達成されることなく、限界をむかえた。それは第二次世界大戦にも関係しているといえる。
　世界平和や人々の平等化を目指すといったものは、今日でも命題となって私たちに向けられている。その一見ユートピア的な話を今後現実にしたいならば、モダニズムの理念を再考することは無駄ではないように思える。

ポストモダニズムへ…

□参考文献
ポール・グリーンハルジュ　『デザインのモダニズム　序章』 鹿島出版会　1997年
阿部公正　『世界デザイン史』 美術出版社1995年
キャサリン・マクダーモット　 木下哲夫　『モダンデザインのすべて AtoZ』 スカイドア　1996年
亀山郁夫　『ロシア・アヴァンギャルド』 岩波新書　1996年
柏木博　『モダンデザイン批判』 岩波書店　2002年
多木浩二　『モダニズムの神話』 青土社　1985年